

オランダの農業に学べ

最近、オランダの農業が話題になることが多い。国土の大きさは日本の10分の1程度、農地の規模でも日本の半分以下の大きさにすぎないオランダだが、その農産品輸出額は米国に次いで世界第2位であるという。この国から日本の農業は多くのことを学ぶことができるとは、まずだ。

農産物の国際競争という点、どうしても米国やオーストラリアのような広大な国土の国の農産物との競争を中心に考えがちだ。確かに小麦・トウモロコシのような穀物であれば、広大な国土は有利で

伊藤 元重

機構大教授 榎東大 研究員 榎東大 研究員 榎東大 研究員 榎東大 研究員 榎東大 研究員

あるかもしれない。しかし、オランダやデンマークのように国土はそれほど大きくなくても、競争力のある農業の確立に成功している国は多い。重要なことは、農業を産業として育てていくことだ。オランダの政府や地域の取り組みは徹底しており、最先端の栽培技術や品種改良を取り入れ、常により優れた

川上村は、レタス生産を中心として平均年収2500万円を稼ぎ、奇跡の村と呼ばれている。千葉県香取市の農業団体和合園は、徹底した合理的農業を展開して、大きな成長を遂げている。

競争力向上へ農政転換の好機

た商品を開発しようとしている。

この点については、日本にも大いに可能性がある。静岡のメロン、山形のサクランボ、宮崎のマンゴなど、例からも分かるように、優れた果実を生産し、見事にブランドを確立している農業者は少なくない。人口4千人程度の長野県

定してはいけない。農産物を加工して、そしてブランド力などをつけながら、より高い付加価値を確保することが求められる。そのためには、農業者だけでなく、食品加工業者、流通業者、輸出業者などが一体になる取り組みが必要である。

6次産業化推進に期待

最近農業の6次産業化という言葉が聞くことが多い。農業は第1次産業だが、そこに加工(製造業)である第2次産業の要素を加え、さらに高い価値で販売する第3次産業の要素も加えようというものだ。1+2+3なのか、それとも1x2x3なのか分からないが、いずれにしろ6次産業に高めようという考え方だ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。